



夜

明

け

め

知

ら

な

い

ふ

た

り

の

し

と

夜 明 け が
知 ら な い
ふ た り の こ と

《聖墓の戦い》の少し前、ある一夜の物語。

エーデルガルトが
熱を出した

近頃の彼女の姿は
以前にも増して
落ち着かない
ものになっている

ヒューベルトに
問い詰めても
「エーデルガルト様
ご判断です」
と繰り返すばかりで
真意を知ることが
叶わない

…熱い



それでも
あの鋭い瞳の奥に隠された
焦りの色を
見間違ふことはないだろう

何かに追われるように
苛立ちを隠そうともしない
その姿は——普段の冷静沈着な
エーデルガルトからは
想像もつかないほどだった

皇女という彼女の
立場を考えれば

一教師である自分が
彼女の私情に
踏み込むのは
確かに越権
なのかもしれない

立場の違い、
責務の重さ、
そんなものが
私と彼女の間に
あるべき距離を
示していた

けれど

師、
誰にも言わないでね

こんな風に弱い姿を
見せるなんて……

私が許される
はずがない

許されない？誰に？
この子はこの小さな肩に
一体どれだけの重荷を
背負っているのだろう

その声は
普段の威厳ある
響きとはほど遠く

どこか
壊れそうなほど
小さくて

強いと思っていた
彼女の深い孤独に
触れてしまった私は

小さく震える手を
取らずには
いられなかった

弱さを見せられる
人がいることは
強さだ

誰かに頼ることが
できるなら
それは罪じゃない

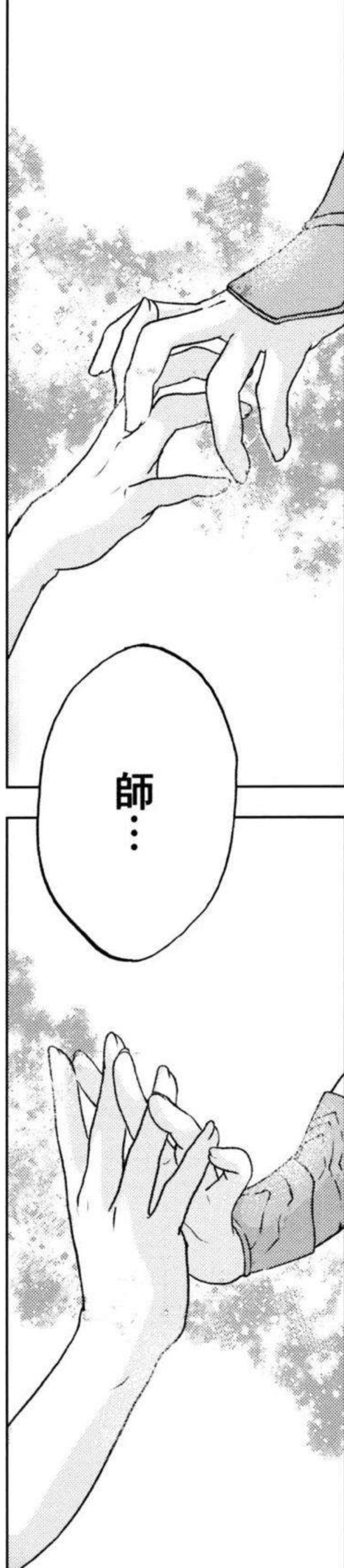


貴方に全て
話してしまえたら
いいのに

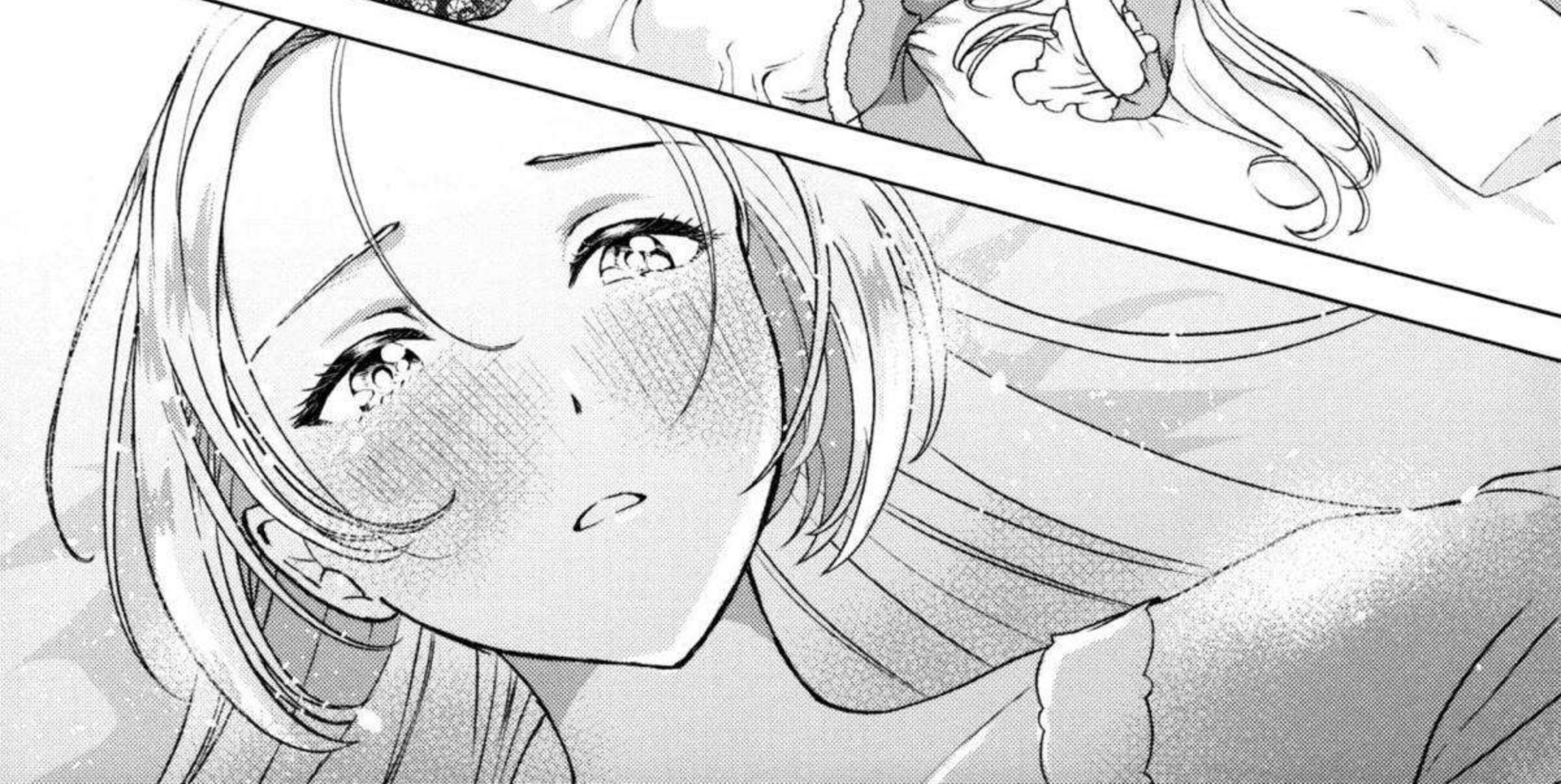
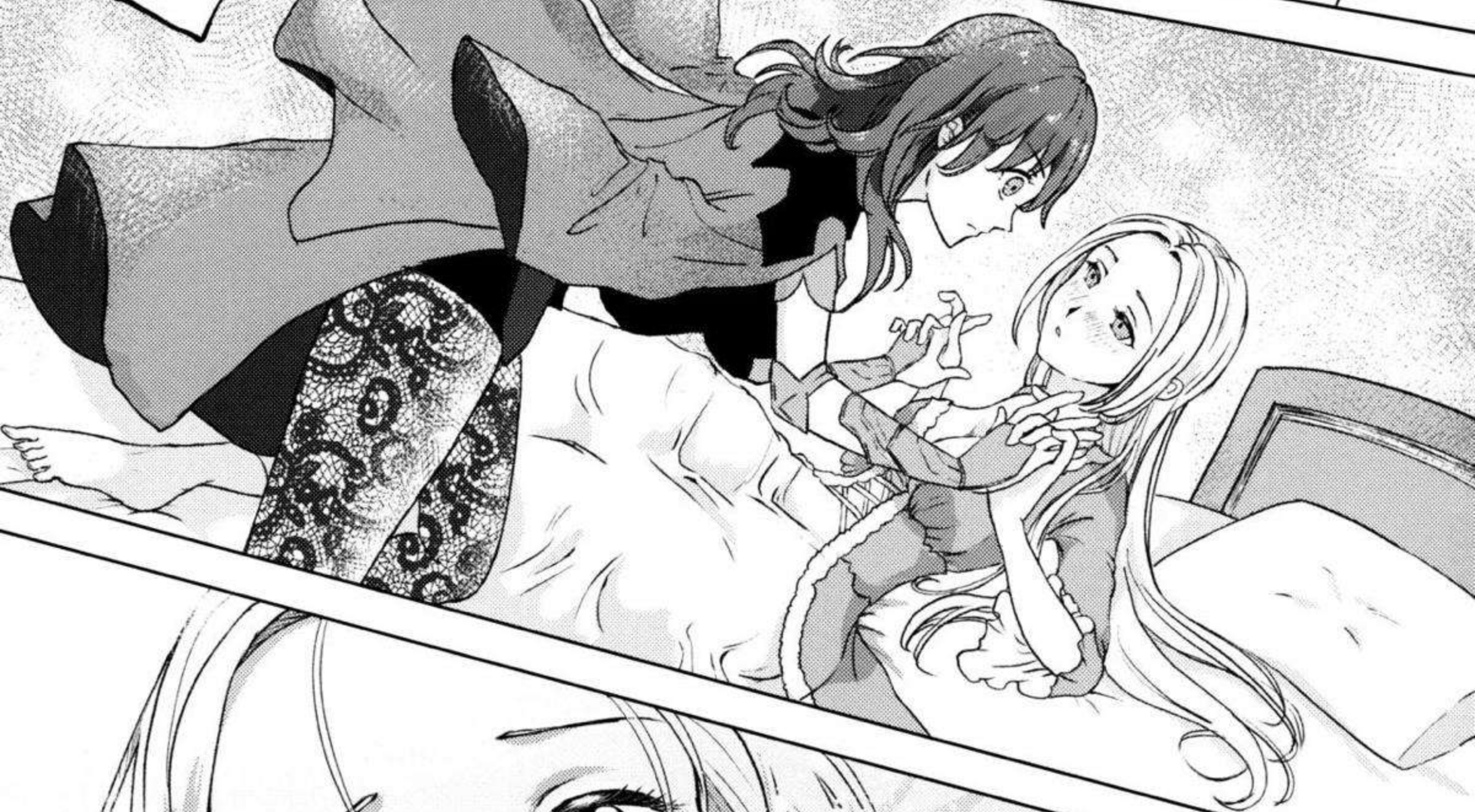


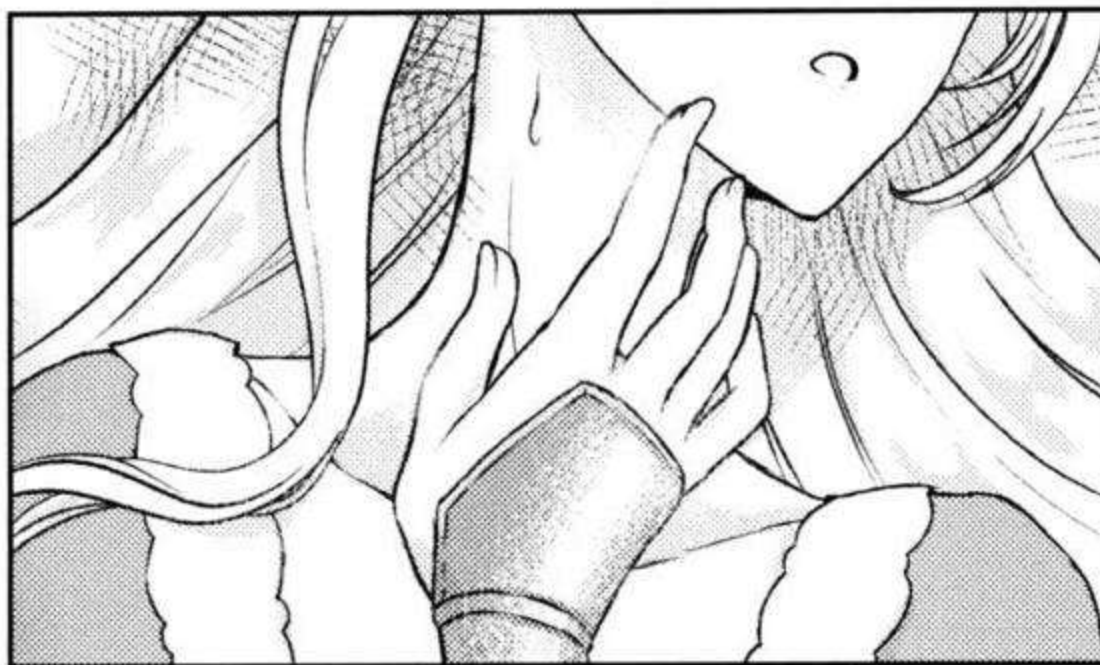
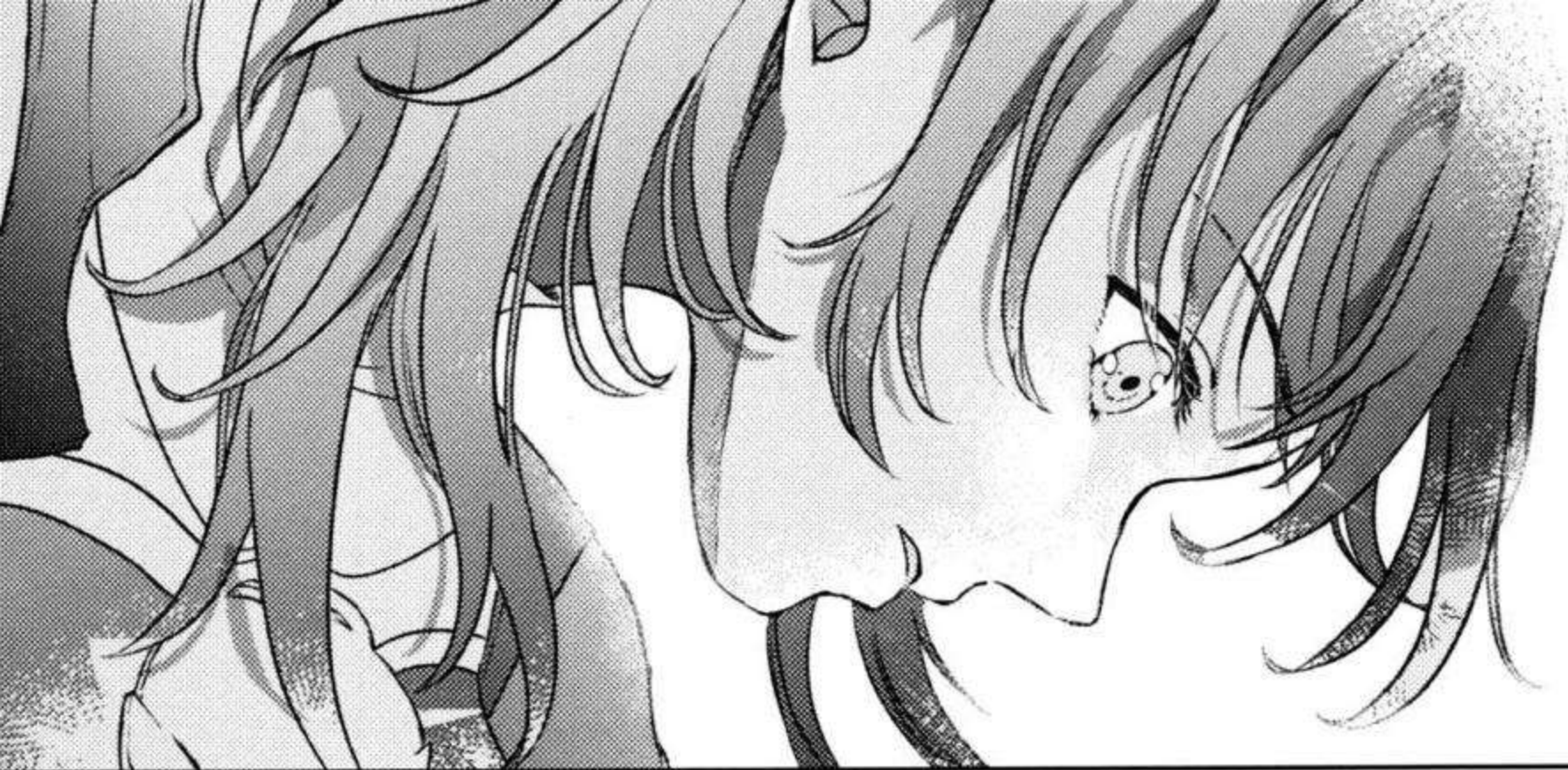


なら、少しだけ
甘えてもいい？

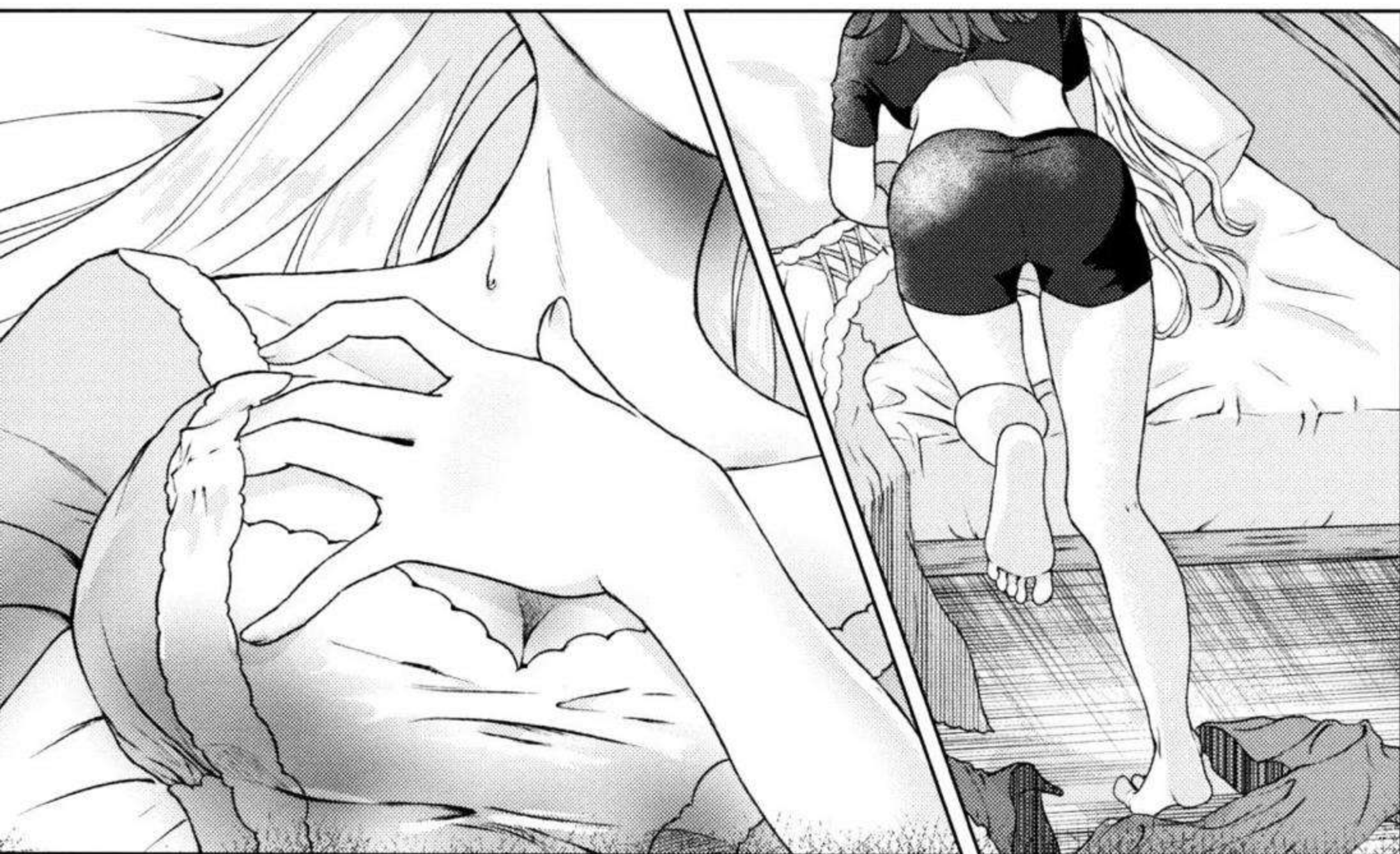


師…





私の中で
何かがはじける
音がした



彼女が私を
受け入れるのも

熱に浮かされた
気の迷い
なのかもしれない

私もそれに
付け込んだの
だろうか

…だとしても



彼女が自分にだけ
見せる姿に

強い光を放つように
生きる彼女の
その奥にある孤独に



私は心を
掴まれてしまった



あの目に、もう二度と
会えなくなるかもしれない――

なぜかそんな考えが
頭をよぎるたび
胸が締めつけられる



ただの教師である
私が
彼女の何に
なれると
いうのだろう



この感情が
何と呼ぶべき
ものなのかは
分からない

それでも
彼女を独占したい
この温もりを
誰にも渡したくない



ただ、私の中で
静かに暴れ出す
この感情に
逆らえない

儚い光を宿した
その視線に
捕らわれて

自分の立場や
ましてや彼女の
立場など
もうどうでもいい

ただの一人の
人間として
この手を離しては
ならないと思った

お手に取って下さりありがとうございます！
士官学校時代に一線を越える背徳感がいいんだよな…
と、己のへキと向き合いながら描いていました。
初めての肌色本、描いてとても楽しかったです。
みれい

ファイアーエムブレム風花雪月 同人誌

夜明けが知らないふたりのこと

感想 お待ちしてます！



マシュマロ

発行日	2025/8/16 コミックマーケット106
製作者 連絡先 X	quartetto/みれい mirei1451@gmail.com @mirei_Laurant
印刷	有限会社 金沢印刷

※無断転載・オークション等への出品、
及び本書籍のAI学習への利用を禁じます。

Fire Emblem:Three
Houses
unofficial fanbook #4



Presented by.quartetto



Fire Emblem:Three
Houses
unofficial fanbook #4



Presented by quartetto